



TITLE:

## 尿管ポリープの3例

AUTHOR(S):

禰宜田, 正志; 松田, 久雄; 片岡, 喜代徳; 上島, 成也;  
今西, 正昭; 片山, 孔一; 植村, 匡志; 栗田, 孝

---

CITATION:

禰宜田, 正志 ...[et al]. 尿管ポリープの3例. 泌尿器科紀要 1994, 40(1): 61-64

ISSUE DATE:

1994-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/115176>

RIGHT:

## 尿管ポリープの3例

泉大津市立病院泌尿器科 (部長: 片岡喜代徳)

禰宜田正志, 松田 久雄, 片岡喜代徳

阪和病院泌尿器科 (部長: 神田英憲)

上 島 成 也

近畿大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 栗田 孝教授)

今西 正昭, 片山 孔一, 植村 匡志, 栗田 孝

## URETERAL POLYPS: THREE CASE REPORTS

Masashi Negita, Hisao Matsuda and Kiyonori Kataoka

*From the Department of Urology, Izumiotsu City Hospital*

Shigeya Uejima

*From the Department of Urology, Hanwa Hospital*

Masaaki Imanishi, Yoshikazu Katayama,

Tadashi Uemura and Takashi Kurita

*From the Department of Urology, Kinki University School of Medicine*

We observed recently three cases of ureteral polyps including a case of multiple polyps. The first patient was a 33-year-old man with multiple polyps at the left upper ureter. The second patient was a 51-year-old man and the third 49-year-old man, and both cases were complicated with ureteral stones.

We divided 88 ureteral polyps reported in Japan from 1970 to 1990 into polyps in children and those in adults. We further divided the individual polyps into single and multiple polyps and examined them clinically.

Characteristic findings were obtained in polyps in children; namely, multiple polyps were dominant, almost all of them occurred at the left upper ureter and no cases were complicated with ureteral stones.

Furthermore, many of the multiple polyps in adults occurred at the left upper ureter and few were complicated with stones as in the children.

In conclusion, the ureteral polyps in children and multiple ureteral polyps in adults were similar in character and we presumed that some congenital factors might be involved in their occurrence.

(Acta Urol. Jpn. 40: 61-46, 1994)

**Key words:** Multiple ureteral polyp, Ureteral polyp in childhood

### 緒 言

尿管ポリープは比較的稀な疾患とされていたが, 近年その報告は増加傾向にある。最近われわれは多発性尿管ポリープ1例を含む尿管ポリープを3例経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

### 症 例 1

患者: S.K. 33歳, 男性

主訴: 肉眼的血尿

既往歴・家族歴: 特記することなし

現病歴: 1985年5月10日肉眼的血尿が出現したため当科を受診した。排泄性腎盂造影, 逆行性腎盂造影にて左上部尿管に線状の陰影欠損を認め尿管白板症が疑われた。以後外来にて経過観察していたところ, 約2年後の1987年8月腰痛が出現, 腎尿管膀胱部単純撮影にて左尿管結石を指摘され加療目的にて8月25日入院となった。

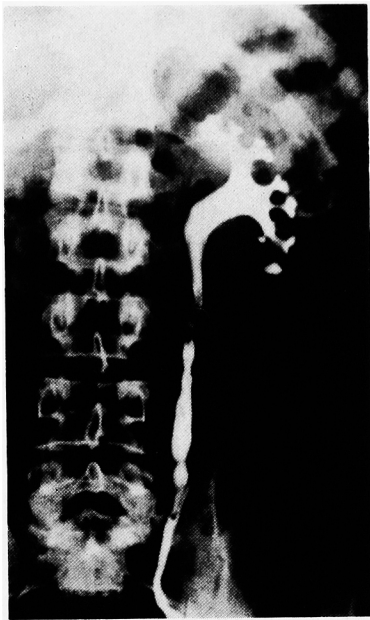


Fig. 1. Case 1: Retrograde pyelography shows linear shadow defect at left upper ureter.

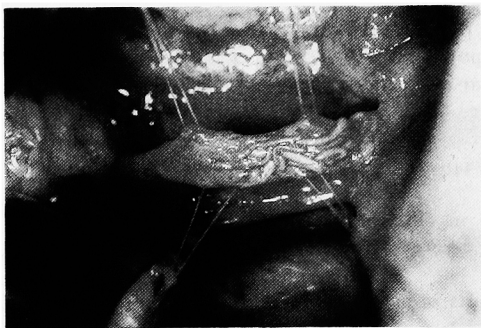


Fig. 2. Intra-operative findings shows about 20 polyps in left upper ureter.

入院時検査所見：一般検血，血液生化学では BUN 25 mg/dl，Cr 1.5 mg/dl 以外に異常所見は認めなかった。尿所見では蛋白 (+)，尿沈渣中 RBC 多数/hpf，WBC 0~1/hpf，尿細菌培養陰性，尿細胞診 PapII であった。

X線所見：初診時の排泄性腎盂造影および逆行性腎盂造影にて左上部尿管に線状の陰影欠損を認めた (Fig. 1)。1987年8月の腎尿管膀胱部単純撮影にて左尿管 L<sub>3</sub> の高さに 10×6 mm の結石を認めた。

左尿管結石に対して1987年8月27日経皮的腎砕石術を施行した。

手術所見：左尿管結石はほぼ完全に破砕できたが，

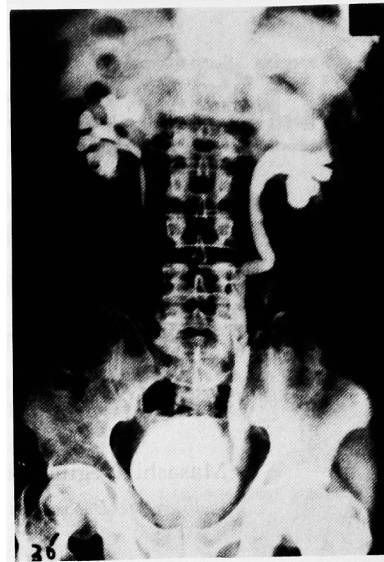


Fig. 3. Case 2: Intravenous pyelography shows left lower ureteral stone and left hydronephrosis.

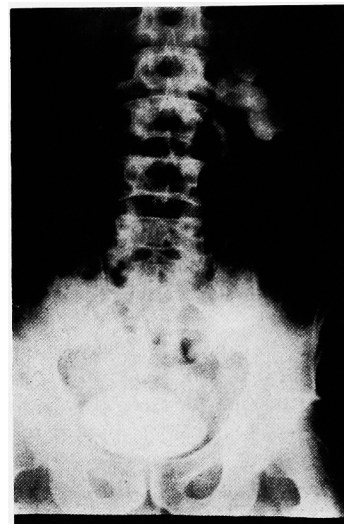


Fig. 4. Case 3: Intravenous pyelography shows left upper ureteral stone (8×4 mm) and left hydronephrosis.

腎盂鏡にて左上部尿管の線状陰影欠損部に一致して表面平滑なポリープ状の隆起を多数認めたためその一部を生検した。

病理組織診断では悪性像はなく尿管ポリープであった。術後残石は認められず経過は良好で9月26日退院となった。その後外来にて経過観察していたが，1989年6月頃より左腰痛および左水腎症が出現した。ポリ

ープによるものと考えられたため手術目的にて再入院となった。1989年7月10日ポリープ切除術を施行した。

手術所見: 左上部尿管を切開すると大小約20個のポリープが認められたが、それらのすべてを切除した (Fig. 2)。切除した一リープの病理組織診断は *fibroepithelial polyp* であった。術後1年4ヵ月後のDIPにて左水腎症軽度認めるも左上部尿管の線状陰影は消失し経過は良好である。

## 症 例 2

患者: T.Y., 51歳, 男性

主: 腰痛

既往歴: 両側腎結石, 右尿管結石に対して1988年7月経皮的腎碎石術, 1988年10月に経尿道的尿管碎石術を施行された。

家族歴: 特記することはない

現病歴: 両側腎結石, 右尿管結石術後外来にて経過観察中であつたが、今回左腎結石が下部尿管に下降し左水腎症も出現したため1989年12月22日入院となった。

入院時検査所見: 一般検血, 血液生化学では異常所見は認めなかった。尿所見では尿沈渣中 RBC 0~1/hpf, WBC 2~3/hpf, 尿細菌培養陰性であった。

X線所見: 入院時の腎尿管膀胱部単純撮影および排泄性腎盂造影により左下部尿管に結石が2個認められ左水腎症も認められた (Fig. 3)。

左尿管結石に対して1989年12月25日経尿道的尿管碎石術施行目的で膀胱鏡を挿入したところ左尿管口より表面平滑なポリープ様の腫瘤が突出していたため手術を中止した。その後1990年1月11日左尿管切石術, ポリープ切除術, 左尿管膀胱新吻合術を施行した。

手術所見: 左尿管膀胱移行部付近の尿管を切開して9×6 mm, 5×4 mm 大の2個の結石を摘出した。さらに遠位部の膀胱壁内尿管を切開すると5 mm 大のポリープを認めたためこれを切除し尿管膀胱新吻合術を施行した。

切除したポリープの病理組織診断は *fibrous polyp* であった。

術後, 新吻合を行った左尿管口に狭窄が出現したため1990年4月23日再度尿管膀胱新吻合術を施行した。現在外来にて経過観察中であるが左尿管口に再狭窄は認めず左水腎症も軽減しており経過は順調である。

## 症 例 3

患者: K.M., 49歳, 男性

主訴: 顕微鏡的血尿

既往歴: 慢性肝炎

家族歴: 特記することはない

現病歴: 1990年7月腸炎にて近医受診中顕微鏡的血尿を指摘されたため当科受診となった。排泄性腎盂造影にて左尿管結石, 左水腎症が認められ1990年8月4日入院となった。

入院時検査所見: 一般検血, 血液生化学では異常所見は認められなかった。尿所見では尿沈渣中 RBC 1~2/hpf, WBC 2~3/hpf, 尿細菌培養陰性, 尿細胞診PapIIであった。

X線所見: 入院時腎尿管膀胱部単純撮影, 排泄性腎盂造影で左尿管 L<sub>3</sub> の高さに8×4 mmの結石を認め左水腎症も認められた (Fig. 4)。

左尿管結石に対して1990年8月7日体外衝撃波結石破碎術を施行した。しかし破碎不良で排泄困難と思われたので8月16日尿管切石術を施行した。

手術所見: 結石介在部尿管を切開すると数個の結石の破砕片を認めたのでそれらをすべて摘出した。また同部位に9 mm 大のポリープを認めたため切除した。切除したポリープの病理組織診断は *fibrous polyp* であった。術後2ヵ月目の排泄性腎盂造影では左水腎症は著明に改善しており経過は良好である。

## 考 察

尿管ポリープは非上皮性中胚葉由来の良性腫瘍として扱われており, 組織像により, *fibrous polyp*, *vascular polyp*, *fibroepithelial polyp* に分類されている<sup>1)</sup>。大沢ら<sup>2)</sup>はこれらに加えて *inflammatory polyp*, *edematous polyp*, *mucosal polyp*, *granulomatous polyp* を分けて7型としている。しかし, 実際にはこれらの組織型が混在している場合もあり, 診断上どの分類に含めるべきか判定し兼ねることもある。また, 尿管ポリープの成因については, 慢性炎症, 機械的刺激, 尿路障害, ホルモン失調, アレルギー, 先天的要因, 等多くの誘因が考えられている。今回われわれは, 自験例3例を含めて1970年から1990年までに報された詳細の明らかな尿管ポリープ88例について<sup>3-12)</sup>, 小児例, 成人例に分け, さらにそれらを単発例, 多発例に分類して臨床的検討を加えた。ポリープには樹枝状のものがあつたが, 根部が1個のものは単発例に, 根部が明らかに2個以上あるものは多発例とした。これらの症例について性別, 結石合併の有無および発生部位について検討した (Table 1, 2)。多発例は小児では28例中11例 (39.3%), 成人では60例中5例 (8.3%) と小児例にその割合が多かった。また単発例, 多発例にかかわらず小児尿管ポリープは, (1)男例男子であ

Table 1. Sex distribution and number of complicated with ureteral stone in 88 ureteral polyps

		小児 (28)		成人 (60)	
		単発(17)	多発(11)	単発(55)	多発(5)
性別	男	17	11	34	5
	女	0	0	21	0
結石	有	0	0	16	1
	無	17	11	39	4

Table 2. Site of 88 ureteral polyps

		小児 (28)		成人 (60)	
発生部位		単発(17)	多発(11)	単発(55)	多発(5)
右	上部	1	0	9	0
	中部	0	0	5	0
	下部	0	0	11	0
左	上部	15	11	9	5
	中部	0	0	8	0
	下部	1	0	13	0

り(2)結石合併例は1例もなく(3)発生部位は28例中26例までが左上部尿管であるという非常に特徴的な所見が認められた。これは小児尿管ポリープの発生機序が先天的要因に強く関与していることを示唆していると思われる。これに対して成人例では、単発例の場合男性34例、女性21例で、結石合併例が16例、非合併例が39例であった。発生部位は右上部尿管が9例、右中部尿管が5例、右下部尿管が11例、左上部尿管が9例、左中部尿管が8例、左下部尿管が13例と小児例と比べると一定の傾向は示さなかった。多発例については自験例を含めて症例数が5例と少ないものの5例全例が男性であり発生部位については全例左腎盂尿管移行部から左上部尿管にかけてであった。また、結石合併は1例のみであった。以上の結果より成人の多発性尿管ポリープは小児尿管ポリープと性格がほぼ一致しており、小児尿管ポリープと同様に明確な機序は不明であるが何らかの解剖学的、発生学的要因によって先天的に発生すると考えられる。尿管ポリープの診断で最も重要なのは尿管悪性腫瘍との鑑別である。一般的に尿管ポリープは画像診断上陰影欠損の形態が細長く表面平滑であることが多いが、画像診断のみでは必ずしも悪性腫瘍との鑑別が容易であるとはいえない。自験例1例で施行したような腎盂鏡、あるいは尿管鏡による肉眼的な病変部の確認を画像診断と併せて行えば術前鑑別診断ができる場合がある。さらに内視鏡施行時に生検を行うと診断は確実となる。尿管ポリープは悪性腫瘍と比較して肉眼的には表面が平滑で光沢があり、易出

血性がないといわれている。治療については術前にポリープと診断できれば腎保存手術を行うべきであるが、術前検査にて悪性腫瘍との鑑別が困難な場合は迅速標本による診断が必要となる。実際これまでの大部分の症例では迅速標本にて診断が行われている。原則的にポリープは良性疾患であるので腎保存手術を選択すべきであり、とくに小児例では悪性腫瘍の合併、あるいは悪性化の報告がないのでポリープ切除術、尿管部分切除術にとどめるのが良いと思われる。

## 結 語

多発性ポリープ1例を含む尿管ポリープの3例を報告するとともに自験例をふくめて最近20年間の本邦報告例88例について、小児例、成人例に分け、さらにそれらを単発例、多発例に分類して臨床的検討を加えた。

本論文の要旨は第132回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

## 文 献

- 1) Scoot and McDonald: Tumors of the ureter. In Campbell and Harrison: Urology 3rd ed. 977, Saunders, Philadelphia, 1970
- 2) 大沢哲雄, 青島茂雄, 武田正雄: 尿管ポリープの2例. 西日泌尿 41: 147-151, 1979
- 3) 由井康雄, 中島 均, 坪井成美, ほか: 尿管ポリープの臨床的検討. 泌尿紀要 31: 677-681, 1985
- 4) 長谷川倫男, 鳥居伸一郎, 望月 篤, ほか: 尿管鏡生検で診断した尿管ポリープ. 臨泌 42: 157-159, 1988
- 5) 岡田克彦, 角井 徹, 藤井元広, 長大な尿管ポリープの1例. 西日泌尿 49: 851-853, 1987
- 6) 菅尾英木, 辻本幸夫, 滝内秀和, ほか: 腎盂尿管移行部狭窄に合併した長大な尿管ポリープの1例. 泌尿紀要 32: 586-591, 1986
- 7) 大藪裕司, 鮫島 博, 江藤耕作: 小児尿管ポリープの1例. 西日泌尿 52: 642-645, 1990
- 8) 武井 孝, 小松秀樹, 上野 精: 尿管ポリープの4例. 西日泌尿 50: 667-670, 1988
- 9) 児島康行, 滝内秀和, 櫻井 昶, ほか: 小児尿管ポリープの1例. 泌尿紀要 35: 1047-1050, 1989
- 10) 薄井昭博, 広本宣彦: 尿管ポリープにともなった巨大水腎症により赤血球増多症をきたした1例. 西日泌尿 49: 1861-1863, 1987
- 11) 杉山寿一, 加藤範夫, 伊藤正也, ほか: 自家腎移植により腎保存可能であった尿管ポリープの1例. 泌尿紀要 35: 111-114, 1989
- 12) 大島憲次, 中村浩二, 井川幹夫, ほか: 小児尿管ポリープの1例. 泌尿器外科 2: 65-68, 1989
- 13) 藤原政治, 三谷信二, 福重 満: 尿管ポリープの1例. 広島病医誌 18: 197-200, 1986

(Received on May 25, 1993)  
(Accepted on July 19, 1993)